

## 新学習指導要領の下の授業実践

— 他者の言葉とのかかわり合いをとおして、言葉の世界をひらく国語科の学習 —

石川 嘉一 杉川 千草 淵山 真悟 西木 英里  
山元 隆春 佐々木 勇

### 1. はじめに

本校では、これまでに小中一貫教育における国語科の総合単元の開発をめざし、カリキュラムや教材作り、指導法の改善などに取り組んできた。また、昨年度までの2年間は、言葉をとおしたコミュニケーションを扱いながら、協同的な学びをつくり出していく過程で見られる言語活動を重視した学習を進めてきた。

そこで本年度は、研究のまとめの年として新学習指導要領の下、国語科の学習の中に意図的、計画的に言葉をとおしたかかわり合いの場を設定している。このことによって創造的な問題解決の過程を踏まえながら、思考力、判断力を育むとともに、表現力を磨き合いながら新たな認識を広げて「言葉の世界をひらく」国語科の学習について探っていくこととした。

### 2. 研究の構想

#### (1) 研究の目的

本研究は、学習者が自分のまわりの他者と出会いかわり合うことをとおして、自分自身の言葉の世界を広げ、自らの学びを探究していくことができるようにするための効果的な指導法を開発していくことを目的としている。この研究の方向は、新学習指導要領に示されている、実生活で生きて働く国語の能力を調和的に育てることをめざし、児童主体の言語活動を活発にしていく中で国語科の目標を確実に豊かに実現できるようにするという目的と方向性を同じくするものである。他者とのかかわり合いをとおして、自分の思いを表現し、実際の言語活動を積み重ねることによって得られる知識や経験をもとにした的確な判断を行う学習を行っていくことで、今後、子どもたちがさまざまな社会や実生活の場面で活躍していくための力を育んでいくことになる。さらに、学びを生活場面に適応させていくことで他者とのよりよい関係を築い

ていくことにつながるであろう。

#### (2) 研究の方法

本研究では、小学1年生と小学4年生を取りあげて考察する。ここでは、言葉の世界をひらく学習を行うために、学習の中に他者の言葉を位置付け、言葉をとおしたかかわり合いの場を意図的、計画的に設定する。

#### (3) 検証の方法

検証の材料として、子どもの学習記録や授業記録などをもとにして考察を行う。

### 3. 実践1-1年「おはなしをたのしくよみましょう」

(「おおきなかぶ」うちだりさこ・やく

—学校図書1年上)

#### (1) 授業の構想

##### ①単元について

本単元は、「おおきなかぶ」を人物の動き・場面の様子を想像しながら楽しんで読む学習である。「おおきなかぶ」のおもしろさは、「うんとこしょ、どっこいしょ」の会話文や似た場面の繰り返し、また小さな力(ねずみ)が大きな成功(かぶがぬける)に結びつくことの二つに大きく集約されると考えた。そこで、これらのおもしろさと子どもたちを効果的に出会わせることで、お話のおもしろさや読書の魅力を子どもたちに感じさせることができる。また、登場人物の動きが多くあるにも関わらず、会話文に限られているため、登場人物の心の声を吹き出しに書く活動や動作化を用いて、楽しんで想像しながら読むことができる単元である。

第1次『うんとこしょ』では、「おおきなかぶ」の繰り返しのおもしろさに気付かせ、楽しみながら読み進めることができる学習を仕組んだ。繰り返しのおもしろさに気付かせるために、場面同士を比べて、相違点や共通点を見つける活動を取り入れた。

第2次『どっこいしょ』では、登場人物の順番には意味があることに気付かせるために、作者の異なる「おおきなかぶ」の絵本を用意し、教科書の「おおきなかぶ」と比べて読む活動を取り入れた。そこで、共通点や相違点を出し合い、気付きを交流して深めることでお話を読む楽しさを感じさせることを試みた。また学習の最後には「おおきなかぶ」と同じくねずみが活躍する絵本を読み聞かせ、学習内容の再確認と読書活動へのつながりをねらった。

②目標

- 「おおきなかぶ」を人物の動きや場面の様子を想像しながら大きな声で調子よく読もうとする態度を育てる。
- 場面ごとの人の動きや様子について想像を広げながら読むことができるようにする。
- 「おおきなかぶ」のおもしろさについて話し合うことができるようにする。
- 登場人物の順番について考える活動をとおして、「おおきなかぶ」のおもしろさにより深く迫ることができるようにする。

③学習計画（全8時間）

第1次 『うんとこしょ』・・・・・・・・・・7時間

- ・「おおきなかぶ」はこんなおはなし(1時間)
- ・ばめんごとによんでみよう (6時間)

第2次 『どっこいしょ』・・・・・・・・・・1時間

- ・「きょうかしよ」と「えほん」のよみくらべ

(2) 授業の実際

〈第1次 うんとこしょ〉

①第1時

「おおきなかぶ」を知っている子どもが多くいたため、お話の内容を子どもたちと確認した後、読み聞かせを行った。また「おおきなかぶ」のおもしろいところをノートに書かせて発表させた。

②第2時～第7時

「うんとこしょ、どっこいしょ」の会話文や似た場面の繰り返しに気付かせるために、場面ごとに比べ読みを行った。また登場人物の心の中を楽しみながら想像して読めるように、吹き出しを用いて心の中を書き活動や動作化を行った。

場面ごとの比べ読みでは、引っ張る人が増えたから、「うんとこしょ、どっこいしょ」はだんだん大きく読みたいという音読の工夫が出てきた。また、「ところが」「それでも」「まだまだ」「まだまだまだまだ」「それでも」「やっ」との順番に、なぜ「それでも」が2回出てくるのか疑問が出てきて、話し合った。子どもたちは、本文を頼りに必死に考え、意見を交流した。子どもたちの中で、一つの考えに収束することはできな

かったが、「わたしなら、2回目の『それでも』は使わず、『まだまだまだまだまだまだ』を使いたい。」など、様々な考えを出すことができた。

登場人物の心の中を想像するために吹き出しを用いて心の中を書き活動では、おじいさんの心の中に焦点をあてて学習を進めた。同じような場面の繰り返しの中でも、変化をつけて書く子どももいた。最後のかぶが抜けた場面では、自分の経験や思いを加えながら、おじいさんの心に寄り添うことができていた。

- ・こんなに大きくなるのなら植えなければよかったと思ったときもあったけど、がんばってよかった。
- ・家族のためにがんばってよかった。
- ・やっとかぶがぬけたぞ。つかれた。おばあさん早く料理を作っておくれ。
- ・おばあさんに、かぶの料理を作ってもらってみんなで食べよう。
- ・ねずみを呼んできてよかった。限界のところをやっとなげた。
- ・大きなかぶになれて言ったら大変なことになってしまったけど、ぬけてよかった。
- ・やった。ついにぬけたんじゃ。おおきなかぶがぬけたぞ！

〈第2次 どっこいしょ〉

「おおきなかぶ」の絵本（話 トルストイ 絵 ニーアム・シャーキー 訳 中井貴恵）を用意し教科書と比べて読み、共通点や相違点を見つけて交流した。絵本を提示した目的は二つあり、違いから教科書での読みをより深めることと読書の世界を広げるためである。子どもたちは、教科書とは違う絵本に驚き、二つを比べることで多くの気付きを出し合った。



表1 教科書と絵本の共通点・相違点

	教科書	絵本
登場人物	おじいさん・おばあさん・まご・いぬ・ねこ・ねずみ	おじいさん・おばあさん・うし・ふた・くろねこ・めんどり・がちょう・かなりあ・ねずみ
登場人物の数	7人	25人
登場人物の順番	大きい順 力が強い順 ねずみが最後	大きい順 力が強い順 ねずみが最後
前書後書	なし	あり
掛け声	うんとこしょ。 どっこいしょ。	うんとこしょ！あ それどっこいしょ！



子どもたちが出し合った気付きは、次のとおりである。

- ・絵本にはうしが出てきました。
- ・登場人物の数が違います。
- ・教科書では出てこない登場人物が絵本にはたくさん出てきました。
- ・おじさん、おばあさん、ねこ、ねずみは同じです。
- ・どちらもねずみが最後に出てきました。
- ・かぶの色がちがいました。

また、「おおきなかぶ」のおもしろさの一つである、小さな力（ねずみ）が大きな成功（かぶがぬける）に結びつくことに目を向けさせるために、ねずみが最後に登場するという共通点（表1の太枠）に焦点をしばり、ねずみが登場する順番を他の登場人物の順番と入れ替えて感じたこと・考えたことについて交流を深めた。子どもたちから「順番を入れ替えてもいい」「順番を入れ替えてはいけない」の二つの考えが出て、その根拠となる理由を交流することで、新たな読みを獲得することができた。

- ・順番を変えてはいけないと思います。わけは、大きい順番ではなくなりバランスが悪くなるからです。
- ・おじさんの後がねずみだと、体の大きさが違い過ぎてひっぱりにくくなるので、順番を変えてはいけないと思います。
- ・力の大きい順番ではなくなります。
- ・順番が変わってもいいと思います。わけは、順番を変えても7人全員の力を合わせれば、かぶはぬけるからです。

学習の最後には、これまでの学習内容の再確認と今後の読書活動への意欲を喚起するために、「おおきなかぶ」と同じくねずみが活躍する「ライオンとねずみ」（イソップ童話 絵 エド・ヤング 訳 田中とき子）を読み本単元の学習を締めくくった。

### （3）学習を振り返って

今回の単元では、「おおきなかぶ」の絵本を用意し、教科書と比べて読むことで、教科書だけで学習したときには出てこなかった気付きを子どもたちから引き出すことができた。類似した二つのものを用意することは、片側だけを見て当たり前として入ってきた情報に再度注目させるために有効である。今回の場合は、多くの「おおきなかぶ」の絵本がある中でも、できるだ

け教科書とは内容が違うものを選ぶことで、子どもたちは多くの気付きを出すことができた。

また、小さな力（ねずみ）が大きな成功（かぶがぬける）に結びつくことに目を向けさせるために、ねずみが最後に登場することに注目させ、登場人物の順番に大きな意味があることを読み取らせたかったが、教科書と絵本の比較だけでは、「順番を変えてもみんな力を合わせることに変わりはなく結果も同じだ」という考えをもった子どもの考えを揺さぶることができなかった。そこで「ライオンとねずみ」の読み聞かせを行ったことは、力の小さいねずみが力の強いライオンを助けるという内容から、「おおきなかぶ」での小さな力（ねずみ）が大きな成功（かぶがぬける）に結びつくことに目を向けさせるために有効であったと考える。このように、「他者の言葉」として補助的に用意した教材は、子どもたちの読みを深めるために有効であった。

しかし、学習者同士の学び合い活動が上手くいかず、学習者としての他者を子どもたちの学びに生かすことができなかった。自分と違う考えをもった学習者の存在に気付きながらも、自分の考えと比べたり、取り入れたりすることは難しい。学習者同士の学び合いについて今後研究を行うことで、子どもたちの学びはより有意義なものになっていくと考える。

## 4. 実践2 - 4年「人物の心情を想像しよう」

（「世界でいちばんやかましい音」

ベンジャミン＝エルキン作—学校図書4年下）

### （1）授業の構想

#### ①単元について

ガヤガヤの都に住むギャオギャオ王子は、誕生日のお祝いに「世界でいちばんやかましい音」を聞くはずだったのに、人々の率直な願いが世界中に広まったおかげで、生まれて初めて自然の音に耳を傾け、静けさと落ち着きのすばらしさに気付かされる。物語は起承転結で構成され、題名や登場人物の設定、繰り返し使われる言葉などがテンポのよい展開につながり、読者を引き付け最後まで一気に読ませる。さらに、題名とは正反対の結末は、読者に物語の意味について改めて考えさせるものになっている。ここでは、一人ひとりの素直な感想や考えを友だちと交流することによって、物語のいろいろな読み方にふれ、物語のおもしろさを自分なりに再発見させるようにした。

指導にあたっては、題名読みや物語の後半部分の予想を本文と比較させることによって、一人ひとりの率直な感想を引き出し、読みの課題意識をもたせるようにした。物語の読みにおいては、子どもたちの課題意

識にもとづいて、物語全体の構成や展開を意識させながら学習を進めさせた。その中で、題名や登場人物の人物像、繰り返し使われる言葉が、物語のテンポよい展開やどんでん返しのおもしろさにつながる作者の巧みなしかけに気付かせるようにした。そして、これまでの学習の中でとらえた物語の主題を自分なりの新たな題名として表現し、その理由を友だちと交流することによって、物語の展開のおもしろさを見つけたり、物語の意味を再認識したりさせるようにした。

## ②目標

- 物語の展開のおもしろさに関心をもって読むことができるようにする。
- 読み取った内容や人物への感想など、友だちとの共通点や相違点を整理しながら話し合うことができるようにする。
- 叙述に即して、登場人物の心情の変化などを想像しながら読むことができるようにする。

## ③学習計画（全8時間）

第1次 物語の続きを予想しよう・・・2時間

第2次 「世界でいちばんやかましい音」を読もう  
・・・3時間

第3次 物語の新たな題名を考えよう・・・3時間

## （2）授業の実際（R児の記録を中心に）

〈第1次 物語の続きを予想しよう〉

### ①第1時

まず「音」からイメージを広げさせ、「世界でいちばんやかましい音」はどんな音だと思うか考えさせた。

私は世界でいちばんやかましい音は、ヘリコプターが飛んでいる時の音だと思います。理由は、ヘリコプターは空の上で飛んでいるのに、地上まですごい音が聞こえるから、空の上のヘリコプターに乗っている人は、すごくやかましい音に聞こえると思うからです。

その後、絵本で、教科書の本文104ページ9行目（その時こくが来たら、みんなあったけの声で、「ギャオギャオ王子、おたん生日おめでとう！」と、さげぶことになっていました。）までを読み聞かせ、続きがどんな展開になると思うか想像して書かせた。

この後、決まった時こくに「ギャオギャオ王子、おたん生日おめでとう」といろいろな国の言葉でいろいろな場所から声が聞こえてきました。そして、その後、ガヤガヤ町に観光客がふえて、今の倍、世界でいちばんやかましい町になりました。ギャオギャオ王子も毎年おたん生日の決まった時こくに「ギャオギャオ王子、おたん生日おめでとう」とさげられるから、大きな声が聞けて幸せになれまし

た。ガヤガヤの町にはたくさんのおとずれて、いろいろな人がガヤガヤの町に引っこしてきて、またさらにやかましい町にしようと考えてその案を実行して、よりやかましい町として世界一有名な町になりました。

### ②第2時

はじめに、前時に考えた各自の続き話を交流させた。子どもたちは、自分の考えた展開との違いに驚いたり、物語の落ちに思わず笑い声をあげたりしていた。その後、教科書で全文を通読し、自分たちが考えた予想と比べながら感想を書かせた。

私は成功すると思っていたのに、成功はしなかったけれど、王子様が生まれて初めて自然の音を聞いて気に入って、世界でいちばんやかましい町から世界でいちばん静かな町になったことが、一人のおくさんの意見で町まで変えてしまったからすごいなと思いました。アヒルもドアも世界中の人が静かにしたら、急にやかましくなくなったので、とてもすごいと思いました。人々が静かにしたから、何もかもガヤガヤの町は平和になってすごいと思いました。

その後、みんなで学習したいことやもっと読み深めたいことなどを学習課題として挙げさせ、全体での学習課題を次のように決めた。

- 王子様はなぜ「世界でいちばんやかましい音が聞きたい。」と言ったのか。
- 王子様は世界でいちばんやかましい音が聞けなかった時に、どう思ったのだろう。
- 作者はなぜこういう結末にしたのだろう。
- なぜ「世界でいちばんやかましい音」という題名を付けたのだろう。

〈第2次 「世界でいちばんやかましい音」を読もう〉

第2次では、第1次で決めた学習課題についてそれぞれ自分の考えをもち、それを交流した後に学んだことをまとめるという流れで授業を進めた。その中で子どもたちは、王子様の心情を読み取るとともに、最初と最後の町の変容をとらえることができた。さらに、「世界でいちばんやかましい音」は物語の中で実現しなかったのに、なぜ「世界でいちばんやかましい音」という題名なのかということに、改めて目を向けることができた。

〈第3次 物語の新たな題名を考えよう〉

### ①第1時

これまでの学習をふまえて、物語の内容にふさわしい新たな題名を各自に考えさせた。

「世界でいちばん不思議な町」

やかましい町も不思議だし、しーんとして王子様が自然の音が気に入っただけで、町が一気に世界でいちばん静かで平和な町になったことが不思議だから、「世界でいちばん不思議な町」という題にしました。

他の子どもたちは、次のような題名を考えた。

- ・世界に一人だけのおくさん
- ・おくさんのおかげで静かになった町
- ・一人の人から世界が変わる
- ・おくさんのおかげで王子の大変身?!
- ・王子様のたん生日
- ・世界でいちばん静かな日
- ・クワックワックワクワ正反対!～たん生日ですべてが変わった～
- ・世界でいちばん静かな町
- ・ようこそ静かな町へ
- ・世界でいちばん変わった町
- ・世界でいちばんすばらしい音
- ・世界でいちばんやかましい音のはずが? など

子どもたちはもとの題名を生かしながら、物語の展開を変えるきっかけとなった人物や出来事、また、物語の結末に着目しながら、それぞれ題名を考えていた。

### ②第2時

前時に考えた自分なりの新たな題名とその理由を友だちと交流し、「なぜ『世界でいちばんやかましい音』という題名を付けたのだろう。」という学習課題について考え、物語の展開のおもしろさを見つけたり、物語の意味を再度とらえ直したりさせた。

作者が「世界でいちばんやかましい音」という題にして言いたかったことは、やかましい音もとても楽しいけれど、「静けさと落ち着きも大切だよ」ということと、「静かな時間をもっとたくさんつくろう」ということを伝えたかったんだと思いました。

### ③第3時

これまでの学習を振り返るとともに、それぞれが物語の続き話や、登場人物の日記、作者の後書きなどを書いて学習のまとめとした。

ギャオギャオ王子の生まれて初めて

今日ぼくは、世界でいちばんやかましい音を聞いたたん生日のはずだったんだけど、世界中の人が一人残らず静かにしてくれて、生まれて初めて自然の音が聞けて、静けさと落ち着きを知ることができて、とてもうれしかったです。

来年のたん生日には、世界でいちばんすてきな歌

声の小鳥をかってもらおうかなあ。毎日毎日きれいな自然の音を聞いたら、とても幸せだろうなあ。もし、ぼくに子どもが生まれて、今度は世界でいちばん静かで平和な町で聞かせてあげよう。

それから、ぼくが王様になったら、このガヤガヤという名前を、世界でいちばん静かで平和な町にふさわしい名前に変えよう。そして、やかましい町だった時にあった歌も作り変えて、自然の音を教えてくれた世界中の人たちに教えてお礼をしようっと。(中略)

とてもすてきで夢みたいなたん生日でした。この静かな空間をつくり出した人たちに会ってお礼が言いたいです。世界中の人たち、本当にありがとう。

### (3) 学習を振り返って

今回の単元では、物語の全文を読む前に後半部分の予想を取り入れたので、子どもたちは本文と比較しながら感想や読みの課題意識をもつことができた。物語の新たな題名をつくる場面では、それまでの読みを振り返り自分なりに物語の意味を考えることにつながった。さらに、友だちの考えた題名を交流することによって、多様な読みのおもしろさにふれることもできた。このように、物語の予想や新たな題名は、自分たちが作りだした「他者の言葉」として、物語の読みを深めるために有効であった。

その一方で、第3次の物語全体を扱う場面では、お互いの思いを十分出し合いながら読みを深めることができなかった。今後は、他者の言葉として、学習者同士のかかわり合いの有効な生かし方についても研究を深めていきたい。

## 5. 考 察

ここでは、二つの実践から、他者の言葉とのかかわり合いのあり方について考察する。

今回は、両学年ともに、他者の言葉として教科書以外のテキストを設定し、教科書本文との比較をおし読みを深めさせる実践を試みた。

1年生では、教科書と絵本を比べることによって、共通点や相違点に気付き、「おおきなかぶ」の読みを深め、本質的なおもしろさに迫っていくことができた。その中で、教科書と絵本に登場する人物の種類や人数、登場する順番などを、挿絵を用いながら視覚的に比較できるようにした。その結果、1年生の子どもたちでも、初めて読む絵本の内容を教科書と比べながら読み取ることができた。さらに、「おおきなかぶ」と同様にねずみが登場する物語を読み聞かせることによって、学習内容の再確認を行い読書指導につなげることができた。

4年生では、他者の言葉と出会わせる前に自分の読

みをもたせることを大切にしたい。まず、導入では、物語の後半部分を予想させたうえで全文を読ませるようにした。そのため、子どもたちは自分たちの考えと比べて、感想や疑問を抱きながら本文を読み、主体的な読みを生み出すことができた。新たな題名づくりでは、それまでの自分たちの読みを総括したうえで、物語の題名や作者に向き合わせるきっかけとすることができた。また、単元の終わりに書く活動を取り入れたことは、これまでの学習を振り返り、自らの読みを表現することにつながった。

二つの実践をとおして、1年生では作者の異なる絵本、4年生では自分たちの読みなど、学年やねらいに応じて他者の言葉を設定することの有効性がわかった。その際、授業のねらいに合わせて、他者の言葉を吟味して選択するとともに、比べ方や比べる視点を明確にすることが必要であると感じた。

今後は、他者の言葉として、テキストとともに学習者同士のかかわり合いを、授業の中に効果的に生かすことのできる単元づくりを試みたい。

## 6. おわりに

以上、本稿の「はじめに」に記したように「創造的な問題解決の過程を踏まえながら、思考力、判断力を育むとともに、表現力を磨き合いながら新たな認識を広げて『言葉の世界をひらく』国語科の学習」の姿を追求してきた。どのような学習を展開すれば「創造的な問題解決の過程」が生まれるのかということが、私たちの課題であった。

読むことの学習が「創造的な問題解決の過程」となるためには、what（何が書かれているか）の読みやhow（いかに書かれているか）の読みだけでなく、why（なぜそのように書かれているか）の読みが必要である。このwhyの読みを生み出すために、このたびの研究では、1年生では絵本と教科書本文との比べ読みを行い、4年生では「予想」活動やもとのものとは異なった「題名」を考えるという活動を取り入れた。いずれの学年でも、設定した活動に取り組むなかで、他の学習者との交流が営まれている。この研究で取り組んだ「他者の言葉とのかかわり合い」とは、読むことにおいてwhy（なぜ）の問いを生み出すためのものであったと言えるだろう。

1年生の「おおきなかぶ」の絵本と教科書の「おおきなかぶ」との比べ読みで浮かび上がったことからの多くは両者の相違点であった。しかし、授業実践のなかで共通点の確認が行われたことによって、すなわち、違いのなかの共通点の確認が行われたことによって、かぶを引っ張る登場人物たちの登場の「順番」につい

ての子どもたちの考察が生み出された。これは、「おおきなかぶ」の授業実践史のなかでも取り上げられてきた問題である。すなわちなぜねずみが最後に登場するのかという問題をクローズアップしたとすることができるだろう。絵本「おおきなかぶ」との出会いによって、なぜこの「順番」で人物たちが登場させられているのかという、この物語の語られ方についての発見を子どもたちから引き出したという点で、考えながら読むことのおもしろさを実感させることができた。

4年生の「世界でいちばんやかましい音」は平成23年版教科書から初めて用いられた教材であるが、このたびの授業実践では、「予想」（「続き話」づくり）と「題名づくり」という二つの活動を織り込むことによって、この新教材の扱い方に一つの方向をもたらしたとすることができる。「予想」（「続き話」づくり）は学習者の各々が予想した物語展開と作者の築いた物語展開とを比較するという営みを促した。また、「題名づくり」の方は、物語内容の意味づけをいざない、作者が示したテーマと各自の読み取ったテーマとを比較する活動をいざなった。ともに「世界でいちばんやかましい音」という物語についてwhy（なぜ）の問いを抱かせる活動であったと言えることができる。こうした問いを抱きながら読み進めることができたからこそ、第3時では、物語の続き話を作ったり、登場人物の日記を書いたり、作者の後書きを作ったりするという活動を能動的に進めることができたのである。きわめて創造的な展開がなされたと言ってよい。

両学年とも、「他者の言葉」とは、学習者にとって既知ではないことがらであったと言えるだろう。そのいずれにおいても、学習のなかで探究の核とした「他者の言葉」が各自の新たな発見をいざなっているという点が、本研究の課題にとって重要であった。

もちろん、読むことの学習がwhyの問いだけで成り立つわけではない。読むことであるかぎり、whatとhowの問いをないがしろにすることはできない。各々の学習者から授業実践報告に示されているような反応が導かれたのは、両学年ともwhatとhowの問いをないがしろにはしなかったことの何よりの証左であろう。

ただ、「考察」において課題として記した「学習者同士のかかわり合い」をどのように促すのかということとは、「創造的な問題解決の過程」を共有することのむずかしさを示すものである。一人ひとりの学習者が示した創造的な反応をどのようなかたちで共有し、協働による創造に結んでいくのかということは、新しい学習指導要領下の授業実践に共通した課題である。この課題をさらに追究していきたい。